

「風化させない」

平成 23 年 10 月記

元東日本大震災復興支援室

調査役 赤間 辰一郎

平成 23 年 3 月 11 日朝、天気は晴れ、午後遅くには雪模様との予報だが、今年最後のスキーに出かけた。今日は少し遠出をして、山形県側のジャングル・ジャングルスキー場へ。11時半過ぎから滑り始めたが、予想よりも早く雪が降り始め、気分もいまひとつ乗り気になれず、早めに帰路につく。

いつもスキー帰りなどに寄る市内のスーパー銭湯へ。湯船に入ったとき時計は2時45分をさしていた。入ると同時に少し横揺れを感じ、あれっ地震？と思った。次第に揺れが大きくなり、建物全体が大きな音を立てて揺れた。感じでは震度6、「三陸沖地震だ！」と大きな声で叫んだのを覚えている。

すぐに湯から退避させられ、急いで服を着て自宅に向かった。途中、信号機はすでに止まっていた。車のラジオが、仙台港に12mの津波、仙台空港にも津波が押し寄せていると報じていた。仙台空港に津波とは、貞山運河を超えてとは、どんな津波だ！とても信じられない、本当だろうか。

次々として入ってくる津波の情報を聴きながら車を走らせ、松島の自宅に辿り着いた。自宅は、松島湾奥で、さらに高木川河口から1Kmほど内陸に入っており、直接津波の被害は受けなかったが、川を遡上してくる津波は大きな音を立てて家の辺りまで響き、非常な恐怖を覚えた。

その日から、電気、水道が止まり、携帯ラジオのニュースだけの生活が続いた。ただ、地方紙の河北新報だけが、地震の翌朝も休むことなく配達され、「東日本大震災」の被害の甚大さを知ることが出来た。電気は15日夕方には再び点灯するようになり、TVのニュースで各地の惨状を知ることが出来るようになった。

3月22日夕方には漸く水道も復旧、また、30日には、手に入らなかったガソリンも、一人3千円と限定ではあったが給油が出来るようになり、物資不足ながらも非常時の生活が何とか出来るようになった。

そんな中、SCOPEの木村仙台支部長から電話を頂き、4月6日、支部に伺った。早速、佐藤理事、木村支部長から、震災復興支援のお手伝いのお話を頂き自分に出来るかなと、少し不安を感じながらも嘱託職員として6ヶ月間の採用辞令を頂きました。

やらなければならないことは沢山頭に浮かんだものの、まず、最初に、早急に現地を確認しなければと考え、仙台支部の石田TEに同行をお願いし、翌4月7日朝8時ごろ、東北新幹線などが不通となっているため、車で仙台を出発、一路久慈港へ向かう。

当日は国土交通省久慈港出張所、宮古港出張所を訪問したが、三陸沿岸部に宿を確保できなかったため、一度盛岡まで戻り、ホテルに宿泊した。

深夜、強い地震（余震）で目覚め、津波は？と思ったが、停電で為す術無く、そのまま眠る。

4月8日朝7時半、盛岡のホテルを後にして、釜石に向かう。途中のガソリンスタンドの前は車の列。

停電で給油に時間がかかっているようだ。昨夕のうちに給油しておいてよかったと思いながら側を通過。

国土交通省釜石港湾事務所に於いては、既に「震災復興支援室」を立ち上げて、早期復旧の支援体制を整えつつあった。一方、SCOPEからの支援要員も4月末には現地入りする予定である旨の計画を説明し、了承を頂いた上で帰途に就いた。帰路は三陸沿岸を大船渡、陸前高田と南下し、気仙沼から内陸に向かい、一関を経て帰仙した。

この2日間のあいだに目にしたこと、それは想像を超えていて、その状況に言葉が出なかった。

TVで見るより現実はまだもっと酷く、まるで映画で見た戦場、関東大震災を思い出させるような、あまりにも想像を超えた惨状だった。市街地はRC、鉄骨構造の建物が残るだけ、4階建ての建物の4階のベランダにまで津波が達していた。木造の住宅などは土台だけを残して、また、各地の防潮堤が無くなっている有様だった。

釜石港湾口防波堤の壊滅的な被災、跡形もない大船渡港の津波防波堤ほか、記憶にある町並みが、土台だけが残され、震災前を知らない人はここに街があったとは到底思えない惨状、この大震災で2万人近くの方が、行方不明になり、また、亡くなられたのだと、強く・深く心に刻み込まれた。

釜石、宮古は電気・水道も通らず、気がつくや街中に電柱が見当たらず、殆どは地上に倒れていた。そして新しい電柱の設置作業が行われていた。震災からすでに1ヶ月近くになるのに、これでは復旧までに相当の時間が必要と感じた。

4月22日仙台市内で、これからの復興支援の任にあたるために全国から集められたSCOPE職員を対象に「東日本大震災復興支援業務研修」が行われ、復興支援の志を新たにしたが、旅の疲れを癒す暇もなく、翌23日朝には各自がそれぞれの任務先に向けて出発していった。

自分は岩手県内に向かう宮古港班2名、釜石港班3名の方々と一緒に2台の車に分乗し、広瀬理事長、佐藤理事、木村支部長ほかの方々に見送られて宿舎を出発した。

途中の被災状況などを確認しながら、一関まで北上、そこから陸前高田、大船渡、釜石を通り、宮古に入った。

当面の宿舎となる浄土ヶ浜パークホテルに到着、チェックインを済ませてホテルの夕食を摂るが、食事は品数も少なく、彩りも悪い。ただ、必要なカロリーを摂るだけと感じるメニューだった。

翌4月24日は日曜日だったので、宮古港より北部の被災状況を知るため、案内をしながら皆で久慈港まで遠出をした。各地の被災状況には、以前の町並みを知っているだけに、改めてその悲惨さを非常に強く感じた。

4月25日宮古港出張所、釜石港湾事務所に初出勤し、SCOPE職員として支援業務開始の挨拶をしました。しかし、事務所側でも、まだ受け入れ態勢が整っておらず、当面の作業として、水に浸かって、乾かすために広げられた資料の整理から始め、その整理を進めていく中で担当港に関する基礎情報を得ていきました。その整理作業を進めている間に、支援業務についての具体的指示を頂けるよう事務所側をお願いしまして、実務の打合せは出来ませんでした。

釜石では電気・水道も無く、パソコン用の電源も発電機を久慈港より借用して使用するような状況で、

本当に執務環境は整っておらず、覚悟はしていましたが大変な状況でした。

そんな中、実際に被災した港湾事務所の方は、仕事でも家庭でも、それぞれいろんな状況にあり、当事者ではない自分たちとはかなりの温度差があるのでは、と心配しましたが杞憂でした。いつも事務所の皆さんには、笑顔を絶やさず、明るく接していただきました。

現地での生活は、釜石班、宮古班ともに、ホテルを確保することができ、3人で10畳間ぐらいの1部屋を使うことになりました。

ホテルには、各県警・保健所からの応援の方、電気関係の工事の方々達が宿泊しておりましたが、垣間見えた警察の方々の就寝状況は、ちょっとした空間にも布団が隙間なく敷き詰められている状態で、それからみれば自分たちはまだ、恵まれた環境かなと思いました。

5月の連休中も休まず仕事を進め、事務所とホテルを往復する毎日が続きました。宮古港出張所では5月半ば頃から毎日帰りが遅くなって、ホテルの夕食の時間に間に合わず、コンビニで調達して済ませることになり、それは9月末の災害査定関係業務終了まで続きました。

仕事を始めたときは、釜石班、宮古班ともに大部屋3人での共同生活でしたが、本部のご尽力により宮古では7月1日から、釜石は8月2日からだったと思いましたが、一人1部屋を確保していただき、就寝という面では大いに助かりました。

そんな中、沖縄支部から応援の方の帰省は一度だけ、福岡支部から応援の田中T E、斉藤T Eのお二人は一度も帰省できませんでした。仕事が多くて多忙を極め、帰省する時間を作れなかったことは、本当に申し訳なかったと思います。

釜石港湾事務所管轄内でも宮古港は歴史も古く、被災した施設は、直轄施工した全施設と併せ、県施工の補助事業分も直轄代行で災害査定を受けるとされ、査定対象は30施設近くがありました。

仕事量は多く、とても予定通り進めることが出来ないと思いましたが、事務所と打合せ調整し、宮古班各T Eの大変な頑張りと、久慈港坂口T Eの応援も得て、九月末までに何とか予定通り業務を終えることが出来ました。ありがとうございました。

8月の応援職員交代時には釜石班の方が港湾事務所で慰労会を開いていただきましたし、また、9月末の業務終了時には、港湾事務所職員とSCOPE職員の全体慰労会が事務所で開催され、お招きいただきました。

発注者・受注者の隔たりのない席を設けていただき、港湾事務所の皆様からは、「本当に助かった、ありがとう。」の感謝の言葉をいただきましたし、ICT関係、特にCAD、EXCELなどの操作でもSCOPEの実力を認めていただき、大いに感謝されました。

この言葉を聴かせていただいて、「SCOPEが震災復興のお役に立てた」と、自信を持って、役所の方々のSCOPEへの感謝と、信頼の気持ちをお伝えさせていただきます。

9月30日に「東日本大震災復興支援室」は第一段階の目的を達成し、私どもも夫々もとの職場に戻り、一息つくことが出来ました。しかし、港湾事務所の方々はこれからが本当の復興・復旧の始まりで、短期・集中事業となり、膨大な仕事量が待っています。

このような状況にある港湾事務所の方々が、体調を崩されることなく、健康で過ごされますようお願い、SCOPEも共にお役に立ち、一日も早い復興がなされることを願っています。

早いもので、あの震災からあとわずか1年を迎えます。

思い返せば、6月頃のある日、いつものように釜石まで打合せに行く車中で気がつきました。被災した町並みには夏草が生い茂り、あの言葉も出なかった惨状が草葉に隠され、何事もなかったように見えたのでした。

毎日、被災した場所で過ごしていると、日々、目が悲惨さになれてしまい、ともするとあの災害を忘れてしまいがちです。あの惨状を見たときの思いを風化させることなく、強く心にとどめ、10年以上は必要といわれる復興が進み、一日も早く、震災前よりも豊かになる未来を待ちたいと思います。

末筆にあたり一言、周りから、がんばれ、がんばろうと聞きますが、これからは「がんばらなくともよい、悲しみを心に留め、一步一步、確実に前へ進もう」と言いたいです。

あるグループの今年の合言葉

“心の絆でファイトだ！”で締めさせていただきます。

ありがとうございました。

復興支援室長追記)

赤間辰一郎さんは、昭和15年生まれで、仙台支部の初代支部長として東北地方における当センターの基盤作りにご尽力いただきました。東日本大震災直後の混乱した時期に再出馬の依頼を快く引き受け、最前線の現場に立って豊富な経験と統率力を発揮し、当局との調整や当センター職員への指導を通じて、東北復興の足掛り作りにご尽力していただきました。ここに、改めて深く感謝申し上げます。